発行
京都教育大学同窓会
発行責任者
会長 牧野 修

京都教育大学 同窓会だより

事務局
〒612-8522
京都市伏見区深草藤森町1
京都教育大学内
TEL FAX 075-644-8353
メールアドレス
dosokai@kyokyo-u.ac.jp

コロナ禍に見た同窓会の原風景

京都教育大学同窓会会長 牧野 修

コロナの影響で令和三年度事業の多くが中止に追い込まれる中で、感染が下火になった好機を捉えて、「写真展」と「講演会」を開催しました。そのなかで、同窓会の原風景を見出しました。

「いいとも講演会」は本学理学科教授村上忠幸先生にお願いしました。

当日、参加者は「メタ認知」の今日的な状況の講話後、探究的学習として、「熱湯を入れた紙コップの底の下に露が浮かぶのはなぜか」の問いに、小グループ(役割機能というべき個性の編成をして)でいろいろな材質の器を使って、解を出すことに取り組みました。参加者は嬉々として、「考える学び」を愉しみました。

散会後の会場にふと立ち寄ると、先生は助手・助言者として参加してくれた大学院生・学生六～七人と反省・検証でしょうか、熱心に話し込まれていました。この光景に同窓会の原風景を見た感じがしました。

先生は、「アゲハチョウの不思議」を探る研究を通じて、探究学習の真正性について究められています(同窓会だより九〇号に掲載)。

恩師が今日的で喫緊の課題である探究学習に先見性を示し、学生が協働(協同)体験を通して専門性と実践知を取得し、(教師)社会人となって(教育)現場の実践で検証していくプロセスで、人材が育成されていることに感銘を受け、同窓会のモットーに思いを馳せたからです。

そして、このような風景が学内に広がっていることを願った次第です。

同窓会も、この二年開催できていませんが、経験知を伝える「あったかトークショップ」や「思い」を伝える専攻代表者会を通して人材育成に寄与しようとしています。

そして、令和四年度こそは総会が開催できる運びとなり、皆様の活動が顕彰できる「語り場」となりますことを祈念しています。

今号の内容

① 会長挨拶
②～③ 教育大の地元を歩く
④ 学び舎
⑤ キャンパスライフ
⑥ HPの紹介
⑦ 紫郊体育会の活動
⑧～⑨ 創る
⑩ アートフォーラム展
⑪ 頑張ってます
⑫ 写真展
⑬ いいとも講演会
⑭ 特別寄稿
⑮ 旧友交歓
⑯ 同窓会行事・編集後記

教育大学の地元を歩く
【藤　森】

教育大学がある伏見を中心に名所や旧跡を紹介していこうと始めた「教育大学の地元を歩く」の六回目は、教育大学の地元も地元、藤森の地を歩いてきました。

▼今回のコース▲

京阪電車「墨染」駅
←4分（250m）
墨染寺
←4分（250m）
欣浄寺
←15分（750m）
藤森神社
←3分（200m）
京都教育大学
←11分（600m）
京阪電車「墨染」駅

QRコードを読み取ると藤森の地図を見てもらえます。

京阪電車の「墨染」駅界隈は、お風呂屋さんや大衆食堂がなくなり、新しいお店やコンビニ、駐車場に変わってはいます。けれども雑然とした人の行き来は相変わらずで、卒業の世代を超えて懐かしさを覚えられることでしょう。

今回はまず、墨染駅から西に歩き、駅名の由来ともなった墨染寺から訪ねてみることにしました。

■墨染寺

墨染寺

日蓮宗墨染寺は、本堂に「桜寺」と書かれた扁額が掲げられているように、境内に咲く美しい桜で有名です。この桜は、花の白さと茎や葉の青さが、薄墨を流したように見えることから「墨染桜」と呼ばれています。

「墨染桜」は、平安時代、当時の太政大臣であった藤原基経がなくなり、この地に葬られたのを悲しんで、歌人上野岑雄朝臣が、「深草の野辺の桜し心あらば今年ばかりは墨染に咲け」（『古今集』）と詠んだことから墨染に咲くようになったと伝わっています。墨染寺の前身は貞観寺と言い、平安時代に建立されましたが、次第に衰微していきました。しかし、後に、この話を聞いた豊臣秀吉が、「墨染櫻寺」として再興することを許したそうです。

本堂前に凛々しい姿で立つ日蓮像に寄り添うように、今年の春も、墨染桜が、美しい花を咲かせてくれることでしょう。と、足もとに目をやると、江戸時代の歌舞伎役者2代目中村歌右衛門が寄進した、「墨染井」と刻まれた手水鉢も見つけることができます。

■欣浄寺

墨染寺から南へ少し歩くと、鉄筋コンクリート造りのお寺の本堂が、駐車場越しに見えてきます。曹洞宗の寺院を巡る釈迦三十二禅刹の第2番、「欣浄寺」です。

欣浄寺では、まず本堂に安置されている、高さ約五・三メートルの伏見大仏に目を奪われます。「伏見の大仏さん」と親しみを込めて呼ばれる本尊は、江戸時代中期の造立で、木造寄せ木造りの仏像としては、日本でも珍しいそうです。少し違和感があった鉄筋コンクリート造りの本堂も、この貴重な大仏様を守るために、一九七三年（昭和四八年）に建て替えられたと聞くと納得がいきます。

平安時代の初期、欣浄寺の場所には、深草少将義宣の邸宅があったとされています。墨染駅から深草駅までが入るほどの広大な敷地でした。深草の少将は、小野小町との「百夜通い」のエピソードで有名です。

小野小町に思いを寄せる深草の少将は、小町に求愛をしました。しかし小町の返事は、「私のところに百夜通い続けたら、お心に従いましょう」というものでした。そこで深草の少将は、深草から小町の住む山科小野の里まで約5㎞の道のりを毎晩通い続け、来た証として榧の実を一つずつ置いて帰りました。ところが、九十九日目の雪の日、少将は、雪の中で、榧の実を握りしめたまま事切れてしまった、という悲恋の物語です。

欣浄寺のお庭には、深草の少将と小野小町の供養塔が、仲良く二つ並んで立っています。また、供養塔の周りには、「小町姿見の池」といわれる池や、「少将通いの道」といわれる小径など、二人にまつわる史跡が残されています。

欣浄寺

余談ですが、山科小野の小町が住んでいた地は、今は随心院というお寺になっています。そこに伝わる「はねず踊り」の歌詞にある百夜通いの結末は、世間で知られているものと少し違う展開になっています。

九十九日目の夜、雪があまりにひどかったので、少将は、代わりの人間に榧の実を持って行かせたというのです。しかし、大雪に少将の身を案じた小町が、その日に限って屋敷に入れて休ませようとしたら、なんと別人ではありませんか。あえなく少将は振られてしまった、と歌われています。小町の里の、微笑ましい伝承です。

■藤森神社

それでは東へ、教育大学の方に向かって歩いて行きましょう。教育大生にとっても馴染みの深い藤森神社があります。

深草の産土神である藤森神社は、弥生時代の二〇三年、神功皇后によって創建されたとありますが、かつての深草郷にあった社を合祀して藤森神社と呼

藤森神社

ばれるようになったのは室町時代の頃のようです。藤森神社は、端午（菖蒲）の節句や五月人形の発祥地とされています。合祀されている神様の中に、武神や学問神がおられることに由来しています。境内の「旗塚」は、神功皇后の新羅攻略の際に使った旗を埋納した塚と伝えられていますし、学問神では、『日本書紀』の編集に功績のあった舎人（とねり）親王が祀られています。文武両道の強い子どもに育ってほしいという親の願いが、「尚武」に通じる「菖蒲」の季節に武者人形を飾る風習につながったのかも知れません。今では更に、「駈馬神事」という馬にまつわる神事が行われることから、「勝負」の神様として多くの競馬ファンも訪れています。

その「駈馬神事」が行われるのが、五月五日（端午の節句）に行われる藤森祭です。神社の参道馬場を疾走する馬上で、逆立ちや一字書きなど曲乗りを披露する「乗り子」さんたちの妙技は必見です。

また藤森祭では、三基の神輿が、氏子の町々を巡行します。そして途中、伏見稲荷大社に立ち寄ります。戦前までは、そこで稲荷大社よりもてなしを受けた後、神輿の担ぎ手たちが、稲荷大社の神官に、「土地かえしゃ、土地かえしゃ」と叫ぶと、神官が、「神様はお留守、お留守」と応えるというしきたりがありました。今でも藤森神社の神官が読み上げる祝詞の中に、その名残りを読み取ることができます。それは、かつてこの場所も藤森神社の社域であり、社があったのですが、稲荷大社の拡大にともない、社を移して土地を貸したものが、そのままになっているので返してほしいということだそうです。

神様の世界も何かと難しいようですが、藤森神社の広く落ち着いた境内は、これからもわたしたちの癒やしの場としてあり続けてもらいたいものです。

■京都教育大学

京都教育大学にやってきました。京都教育大学は、一八七六年（明治九年）上京区の京都御苑内旧准后里御殿を仮校舎として京都府師範学校が創立されたことをもって、その歩みを始めます。その後、一九四九年（昭和二四年）旧京都師範学校及び京都青年師範学校を包括して京都学芸大学が設立され、一九五七年（昭和三二年）現在地に移転します。京都教育大学に名称が変わるのは、一九六六年（昭和四一年）のことです。

京都学芸大学が設立された頃、大学の本校は北区の小山に、分校が伏見区の桃山にありました。しかし、いずれの施設も老朽化し、市内に移転場所を求めていました。そんな時に白羽の矢が立ったのが、今の大学の敷地です。当時この場所には、旧陸軍歩兵第九連隊の施設を米軍が接収し、「キャンプ・フィッシャー」として使っていましたが、一九五四年（昭和二九年）米軍の帰国により空き家となっていました。そこで大学が移転先に名乗りを上げたのですが、他に国立京都病院や航空自衛隊というライバルたちがいました。そんなライバルたちとも折り合いをつけ、移転がなったのは、大学はもとより、学生や地元市民の応援があったためだといわれています。

京都教育大学

大学の西門から少し歩いた藤森神社の北口に京都歩兵連隊跡の石碑が建っています。

歩兵連隊石碑

この地には終戦までの約五十年間、歩兵連隊が置かれていました。のべ約十万人の兵隊が、苦楽をともにしてきた場所でした。以前の号でも触れましたが、歩兵第九連隊は、太平洋戦争末期の一九四四年（昭和一九年）、フィリピンのレイテ島、サマール島に配備され、上陸してきた米軍との激闘で、玉砕を余儀なくされます。

石碑の建設趣意書には、「国運の隆盛と世界の平和とを祈念し思い出多きこの聖域にこの碑を建てる」とあります。人々の思いが交錯するこの地で、平和を願い、教育を学ぶことの意義を感じます。

□藤ノ森小学校

教育大学に一番近い公立小学校、それが京都市立藤ノ森小学校です。

今回は、藤ノ森小学校の東原校長先生にお話を伺ってきました。

東原校長先生は体育学科で、一九八四年（昭和五九年）度卒業ですが、特筆すべきは、先生たちが中心になって、京都教育大学に初めてのボート部を作られたことでしょう。それは先生が一回生の頃、高校時代にボート部だった先輩に誘われて、一緒に立ち上げたということです。最初練習は、琵琶湖漕艇場で時間貸しの船を借りてしていたそうですが、いくつかの大会で実績を積んだ結果、大学が自前の船を購入してくれました。四人乗りのカッターと呼ばれる種類の船に「紫光号」と名前をつけ、週三回、琵琶湖の瀬田川に出向いては練習を重ね、部員も三十人を超えるほどになりました。部員同士も仲が良く、夏は、兵庫県の竹野で合宿をした思い出があるそうですが、ボート部は、その後、部員不足からなくなってしまったということです。

藤ノ森小学校

バイタリティーに富む学生時代を送られた東原校長先生ですが、その力は、今の学校運営にも生かされています。

学校教育目標に「自ら学ぶ意欲と豊かな人間性を持ち、心身共にたくましく生きる藤ノ森の子」を掲げ、とりわけ人権教育において、多様性を認められる子の育成を目指しておられます。その一例が「人権ウォークラリー」と題して、一年生から六年生までの縦割りで、それぞれの学年の取組を交流する取組です。LGBTや障がい者問題、同和問題などといった人権の問題を考え、全校集会「藤小タイム」で人権作文を発表することなどにより、子どもたちの人権意識の確実な成長をつかんでおられます。

ここにも、教育現場で活躍されている教育大学の同窓がおられました。

学び舎

大学の今

センターが中心と位置づけられる大学に

教育創生リージョナルセンター機構長
榊原　禎宏

本機構は、教員養成、教師教育および教育課題に対応するリージョナルセンターとして、地域の教育創生に貢献するための事業を推進することを目的に、二〇一八年四月に創設されました。詳しくは、大学内のWebページをご覧くだされば嬉しく思います。

ここでは、教育創生リージョナルセンター機構の活動を二つご紹介するとともに、本センターが文字通り大学の「中心」と位置づけられるよう、みなさまのご指導とご支援をお願い申し上げるものです。

その一つは、「先生を〝究める〟Web講義」です。本学の教員およそ百名はミニ総合大学とも言われるように、実に多様な分野で研究活動を行っています。その成果の一端を、学校関係者のみなさまに知っていただき、直接・間接に日々の教育活動に役立ててほしいと、本機構では現在百本を越えるeラーニングコンテンツの作成と維持管理を行っています。これらを通じて、大学と京都府下の学校が教育・学習上の今日的課題を情報共有するとともに、「よりよい学校」に向けた相互協力と連携を進められることを目指しています。なお、二〇二二年度からは、運用システムが大きく改定されます。アクセスが容易となりさらに多くのコンテンツをご覧いただけるようになると自負しています。また、内容もコンパクトにわかりやすくお伝えできるようにとも検討中です。このWeb講義をより多くの方々に活用いただけることを願っています。

もう一つは、デジタル化に対応する教育内容・方法の革新を促すための活動のひとつである、デジタル教科書の学習会です。Society5.0の招来が叫ばれ、児童・生徒一人に一台のデジタル端末とGIGAスクール構想が具体化されつつあるにもかかわらず、学校教員の教育活動の多くは依然としてアナログ的ではないでしょうか。紙や鉛筆あるいは黒板の良さを残しつつも、電子化を通じて業務の省力化を図るとともに、教科横断的で総合的で多様な教育活動を作り出せる、これまでとは違った発想と実践ができる教員を輩出することは重要な課題でしょう。

このような活動を通じて本リージョナルセンター機構は、学生と現職教員のみなさんが、いっそうやりがいと成果を得られる、働きやすい学校づくりに貢献できることを目指しています。

特別寄稿

「将来への学びの土台づくりと生涯研鑽場」としての大学の支援、応援を

元京都教育大学学長　位藤　紀美子

位藤紀美子先生は、昨年秋に瑞宝中綬章を叙勲されました。誠におめでとうございます。そこで今回、先生に京都教育大学同窓会に向けて一文を寄せていただきました。

はじめに

京都教育大学は、明治九（一八七六）年創設、昭和二十四（一九四九）年に国立大学となり、長い歴史と伝統を受け継ぎ、今日に至っています。その大学を、戦前・戦後にわたり、支え続けていただいている同窓会の皆様がたに厚く感謝申し上げます。

私は、四十五年になる大学の勤めの中、京都教育大学に四十二年半（教員《昭和四十八年四月～平成二十一年三月》、学長《平成二十一年十月～平成二十八年三月》）在職できたことをありがたく存じます。

本学では、まず学生が生涯学び続けるための研究室づくりから取り組み、最初の国語科教育専攻ゼミ生中心に卒業後、研究会を始め、他の専攻卒業生や他大学出身の現職教員も加わり、在学の学部生、院生ともに、月例会等を継続することができました。

一、広大で、豊かな大学キャンパス

本学は戦後早く移転したため、交通の便のよい、山の中腹の閑静な場所に、広々とした敷地が得られ、構内の緑の樹木が眼を楽しませるとともに浄化してくれているようです。着任前後から四十余年の中に、教育工学センター（昭和四十七年）をはじめとし、次々と新たな施設ができ、多様な機能を分担・連携して発揮できるようになってきています。学生や教職員、地域のかたがたが活用できる充実した探究の場として、恵まれたキャンパスです。

二、幼児教育から高等教育まで～七附属学校園

幼稚園から高等学校まで、七附属学校園があることは、本学の特色の一つです。各校園は、学生の教育実習を行うとともに、それぞれ独自な教育研究を継続しています。加えて、大学と連携し、学習者の発達研究ができます。着任後、教育研究所（昭和二十六年本学設置：大学と附属学校園の全教員加入の組織）の「国語部会」で、園児から学生（後に院生も含む）までを対象に本格的に取り組むことができました。共通の文学作品を取り上げその読みの発達状況や、絵や写真等を材料に作文の発達について共同研究として成果を出しました。また、国語部会では、共同研究と併せ、各校園での授業研究も回り持ちで実施し、個々の学習者の育つ姿を直接見ることができました。さらに各校園独自の研究会にも継続的に参加させていただきました。理論と実践との双方向の研究ができることは、教育研究において重要です。

三、「教科教育学」の設置

平成二年、本学に大学院「教科教育学」設置（文部省の設置方針は昭和四十二年）。学内の準備に二十年余かかっています。教育実践研究指導センター（教育研究所と教育工学センターを統合）の第三部門「教科教育」所属の大学教員が中心になって、教員配置やカリキュラムの整備等、学部のものから着手し、相互理解や協力態勢を進めました。設置後、特に現職教員を含めての授業や研究会は一段と充実したものになりました。多様な年齢や経験の人々の議論から、斬新な考えやテーマ、方法が生まれ、それぞれの人独自の探究の支えになります。

その後、特に現職教員を対象に、私学と連合の教職大学院ができました。

教育大学は、いつでも、「教育」に特化しながら、多様な分野を総合的に学ぶことができる「場」です。これからの時代・社会には、いっそう必要なことだと考えます。

おわりに

未来に向けて、京都教育大学には、歴史にも学び普遍となることを受け継ぎ、変わるべくして変わっていくことを願っています。同窓会の皆様がたには、今後とも、本学の発展のために、いっそうのご支援・ご協力をどうぞお願い申し上げます。

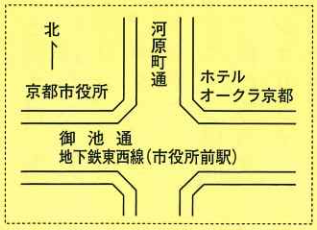
今春入学された新会員のかたがたには、めでたく大学生になられたお祝いを申し上げます。コロナ禍の厳しい状況ですが、新たな友、先輩、師を得て将来の土台となる実り多き大学生活を過ごされることをお祈りいたします。

同窓会のさらなるご発展と、会員それぞれのかたのご健勝とご活躍を祈念いたしております。

令和４年度定期総会ご案内

＜午前10時から受付開始＞

と　き　令和４年７月９日（土）
ところ　ホテルオークラ京都（河原町御池）
　　４階 暁雲の間　☎（075）211－5111
交　通　地下鉄東西線の「市役所前駅」下車
　　③番出口からエスカレーターで直通
会　費　9,000円
　　（受付でいただきます）



内　容　10時00分～　受　付
　　11時00分　総会開会
　　12時30分～15時　懇親会

出席申し込み等は事務局へ
TEL・FAX（075）644－8353
Eメール dosokai@kyokyo-u.ac.jp

◆申し込み締め切り
令和４年６月21日（火）まで
別紙申し込み用紙に必要事項を記入し、事務局まで出して下さい。
・同期会、学科、支部、ゼミ、クラブ、職域等グループ、または個人でお申し込みいただけます。

11時開会です

第23回写真展のご案内

開催日時：令和４年11月11日（金）～14日（月）10時～16時（14日は13時まで）
　　教育大学の学園祭（藤陵祭）の実施日に合わせて企画（予定）
開催場所：京都教育大学附属図書館　１階企画展示室（予定）

作品募集要項

①作品出展資格　京教大関係者・写友（一般写真愛好家）
②出展作品　一人２点以内（写題は自由）＊撮影年月日と天地が判るように裏に表示する
　　四つ切り（ワイド版にしないこと）または A4版、額は当方で用意します。
③申し込みと問い合わせ先
・出展の申し込みは、10月21日（金）までに、申し込み葉書でお願いします。
・申し込み葉書が必要な方は、同窓会事務局までご連絡ください。
・京都教育大学同窓会事務局
　〒612-8522 京都市伏見区深草藤森町1　Tel・Fax 075-644-8353
④勉強会　11月14日（月）13時～15時
・場所：写真展示場　講師：藤井晶夫氏（日本国際写真連盟会長）予定
⑤作品の提出及び返却
・提出日　11月３日（木）までに、同窓会事務局に持参、郵送、宅配でお願いします。
・作品を直接事務局へ持参の場合は、あらかじめ事務局へお電話をください。
・返却日　11月14日（月）勉強会終了後お持ち帰りいただくか、後日宅配便にて返送します。

令和４年度「いいとも講演会」

令和４年11月12日（土）13：30～

演題「秋を唄う ～心に響く歌とは～」
講師：京都教育大学音楽科准教授　田邉 織恵先生

編集後記

元号が新しくなり、いよいよ令和の幕開け…と言っていた日がつい先日のように思えますが、早くも令和四年の春を迎えます。

この間、教育現場では、新型コロナウィルスに翻弄されたり、GIGAスクール構想が一気に進み、子ども一人に一台のタブレットパソコンが当たり前になったりと、大きなうねりがありました。

教育における「不易と流行」で言えば『流行』は目まぐるしく変化し、価値観も多様化しています。普段からアンテナを張り、自分自身も柔軟にアップデートするよう心掛けたいものです。

『不易』については、多くのこと～例えば教育に対する熱い思いであったり、人と人とのつながりであったり～を大学で学びました。そして今も変わらず、同窓会の中に綿々と息づいていることを感じます。

今回の同窓会だよりも、コロナ禍にもかかわらず多くの皆様のお陰で完成いたしました。この場をお借りしてお礼申し上げます。

〈編集委員〉
走井　徳彦　山本　早苗
中東　朋子　深尾　清美
谷　早苗　飯田　一輝